慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府	
Sub Title	On the making sculptures at Tōdaiji Temple in the Kenkyu period by	
	Kamakura Shogunate	
Author	塩澤, 寛樹(Shiozawa, Hiroki)	
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会	
Publication	2006	
year		
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.21 (2006. 5),p.176(1)-157(20)	
JaLC DOI		
Abstract		
Notes		
Genre	Departmental Bulletin Paper	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN10065043-20060531-0176	

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府

塩 澤

寬

樹

はじめに

を生み出すこととなった。それは彫刻史においても例外ではなく、康慶、運慶らによって推進された新様式が開花す 有の事件が起こったことはよく知られる。その翌年から着手された南都復興の事業は、その過程で様々な新しい文化 る舞台になったとして、研究史上かねてより注目されてきた。 源平合戦の最中の治承四年(一一八〇)十二月、東大寺と興福寺が炎上したいわゆる南都焼き討ちと呼ばれる未曾

に行ったことが判っており、南都復興当初、 とりわけ東大寺復興の第二段階ともいえる、建久五年十二月から始まる中門二天像以降、大仏殿内脇侍像 南大門金剛力士像の造像は、鎌倉時代彫刻史の重要な節目と目されてきた。これらの造像は、 院派・円派に比べて劣勢であった彼らが、両派と肩を並べ、躍進を果た 慶派仏師が独占的 四天王

(2) 175 復興事業を幕府が強く支援していたからであり、文治年間以来、慶派と密接な関係を持ってきた幕府が、 の起用を後押しをしたからと説明されてきた。近時、山本勉氏は、これは幕府関係の造像を担当する仏師の主流 したきっかけになったとみられてきた。ところで、これまで、この慶派による独占の原動力になったのは、 復興造像へ が成

朝から康慶一門に移ったことのあらわれとされ、その理由として、康慶工房の規模の大きさを挙げておられる。

の造像事情や仏師選定について、改めて考察してみることとする。 東大寺への復興支援の全体像を確認し、次いで院尊による光背制作の事情を検討し、その上で中門像・大仏殿内諸像 考察するという視点から眺めることによって、別な見方も可能かと私考される。そこで、 鎌倉時代の彫刻史上、確かに大きな意味を持つ東大寺復興造像については、幕府の側からその造像事情を 本稿では、まず幕府による

第一章 復興支援の状況、主体者、目的

体を見通しての視点が必要であると思われる。また、支援の内容には、米や黄金などを奉加するという直接的なもの に及ぶかなり長期にわたっていることが知られる。したがって、東大寺復興に関わる造仏を考える際には、 最初に、 配下の御家人に命じて仕事を請け負わせるという間接的なものがあることも分かる。 復興を支援した期間を確認しておくと、稿末の年表の通り、元暦元年(一一八四)に始まり、 幕府による東大寺復興支援の状況を年表で振り返りながら、 基本的な問題を確認しておきたい 建久年間後半 やはり全

それらはいずれも主体者が頼朝であることを伝えている。つまり、この復興支援は幕府によるものといえなくはない その上で、改めてこれら支援の幕府側主体者について考えてみる。それぞれの内容を伝える史料・文書を見ると、

とはいえ、頼朝が継続して並々ならぬ意志をもって行ったことは確かであり、これを正しく認識しておくことは が基本的には彼によってなされているといってよいので、復興に関わることだけが特別なことというわけではな より正確には頼朝の強い意志によるものと捉えた方がよい。もっとも、 頼朝執政下においてはほぼ全ての判断

考察の前提として重要と思われる。よって、以後、彼をこの支援の主体者と見て検討を進めてゆく。

意図は、 の大檀越となるという政治的意図が指摘されることが多く行われてきた。 支援の目的について考える。これについては、これまで頼朝の信仰心もさることながら、むしろ東大寺復興 例えば 『吾妻鏡』文治元年三月七日条に載る頼朝が南都衆徒に送った書状に、「如」旧令」遂||修復造営 本稿もそれに全面的に賛同したい。 頼朝

それを天下に示すことであろう。東大寺と対照的に、 る頼朝の意図と意欲を見出せよう。ただし、支援の経過や内容をさらに細かく分析することにより、 候歟」(王法仏法共に以て繁昌し候はんか)とあり、 所在をより正確にみつけることができるように思われる。 奉 鎮護国家 也。 (旧の如く修復造営を遂げしめ、 鎮護国家、王法仏法の繁昌という国家的な政治的目的を果たし 私寺の興福寺には冷淡であったことからも、 そこで、 鎮護国家を祈り奉らるべきなり)、「王法仏法共以繁昌 年表から頼朝自身が米・黄金・絹などを奉加 東大寺復興に対す 彼の目的 や関心

直接的な支援を取り上げてみると、 元暦元年六月の大仏鍍金用の黄金千両 次の通りである。

③建久五年三月の光背漆箔のため ②文治元年三月の米一万石 ・沙金一千両 0 砂金 上

同 年五月の光背漆箔のための砂金百三十 庙

⑤建久六年三月の大仏殿供養に奉納の米一万石 ・沙金一

千両・上絹一千疋及び東大寺への馬千疋

これは開眼供養への奉加と推察される。すると、頼朝が直接行った奉加の中身は、大仏鍍金 六年三月十二日の大仏殿供養への軍兵数万を率いての参列であった。その姿が都人らにいかに強烈な印象を与えたか は、『愚管抄』などに記される通りである。この時の参列で頼朝の目的はほぼ完全に果たされたとみてよいのではな 仏開眼や大仏殿建立といった区切りでの大きな供養の二つに絞られている。こうした最も中心となることへ奉加する れを見れば、 右を少し補足すれば、②は大仏開眼供養の五か月前で、奉加の内容が⑤の大仏殿供養の折とほぼ同じであるので、 (③④)と、大仏開眼供養(②)及び大仏殿供養(⑤)への米・金・絹等に限定されていることが分かる。こ 大檀越としての存在を効果的に天下に示すことを狙っているのであろう。そして、その総仕上げが建久 彼の関心の所在は明らかであろう。つまり、 大仏(本体と光背)の完成、とりわけ仕上げの金色と、大 (①) 及び光背漆箔のた

える。こうした頼朝の支援に対する姿勢や方針は、その間の造仏の仏師選定を検討するうえでも重要であろうと思わ 人らに命じて請け負わせるだけである。大仏殿建立にとって不可欠な木材調達に関しても、 以上を別の角度から見ると、前記のようないわば目立つ部分以外では、 自ら奉加すべきことと配下に請け負わせることを峻別するという冷徹な姿勢は、 彼は直接の奉加などを行ってい 実に徹底しているとさえい 彼自身は費用負担をして ない。

弗二章 大仏光背の制作

れる。

かろうか。

建久五年(一一九四)三月十二日に始まった大仏光背の制作は、 その後の中門二天像、 大仏殿内脇侍像・四天王像

より上位の仕事とみられる。 大檀越たることを目指す頼朝もよく理解していたと考えられる。第一章の通り、彼は自ら光背制作のために、 などに比べて、ことさらには注目されてこなかった感があるが、大仏の光背である以上、大仏殿内諸像よりも重要な、 復興の経過から見ても、 大仏本体の次で、 脇侍像・四天王像より先である。このことは 漆箔用

砂金を二度にわたり計三百三十両送っている。光背は大仏の一部である以上、その完成は来るべき大仏殿供養に不可

ところで、この光背制作は、 法印院尊率いる院派の主要仏師たちが担ったことが分かっているが、 彼らの 起 用 に果

欠であったからであろう。

たして頼朝はどの程度関与していたのだろうか。結論からいえば、彼はこの仏師選定には関わっていないとみるべき

建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府 た砂金は直接京都 師もい 派を外した根拠とするのは難しいことは以前に述べたことがある。 を伝えるが、これに何らかの圧力を加える工作をしたらしいこと、これを鎌倉勝長寿院本尊の仏師選定に当たり、 である。この条は、 であろう。 光背制作の仏師起用に頼朝が何らかの意志を及ぼしたとすれば、 た中で、 院尊と頼朝といえば、ただちに思い浮かぶのは、 わざわざ院尊を選ぶというのはどうにも理解に苦しむのである。 の院尊のもとへ送っていることを伝えている。院尊一 院尊が造った源氏調伏の五丈毘沙門天像が近く供養されるとの報告に、 かねて注目されてきた『吾妻鏡』 しかし、それ以降のことに関しては話は別であ 他に成朝も、 門の起用がいかなる経緯で決まったか しかも、 康慶も、 『吾妻鏡』 頼朝が不快を示したこと 運慶も、 建久二年五月十二日条 は ある 類朝 0 は はにわ 奉加 円派仏

め た頼朝の東大寺復興への姿勢や、 頼朝の意志が反映されたのであれば、 院尊による光背制作などを見る限り、 光背制作にこそ、 その力が及んでしかるべきではなかろうか。 彼は東大寺復興造仏の仏師選定に何らか 第

(5)

先述のように、

光背は大仏殿内諸像より上位であり、

頼朝の関心も高かった。東大寺復興造像の

仏師選定に、

頼朝の意志ではないことだけはいえるのではなかろうか。

かには明らかにし難いが、

かったのではないかと思われる。

(6) 171 加によって荘厳された光背が完成すること自体が重要で、 れゆえ、この場合は担当仏師が誰であろうとも、その点に関心はなく、また、仏師選定にいたずらに介入する気もな 力を及ぼしているとは思えないのである。恐らく頼朝にとっては、誰によって光背が造られるかではなく、 その功により大檀越となることが関心事であったろう。そ 自らの奉

中門二天像と大仏殿諸像の仏師選定

については、『東大寺続要録』(以下『続要録』)、『東大寺造立供養記』(以下『造立供養記』)、『鈔本東大寺要録』 日に始まり、八月二十七日に完成、四天王像は同年八月二十七日に始まり、十二月十日に完成したと整理され、現在(⑤) 下『鈔本要録』)などの記載に違いがあるが、毛利久氏の詳細な検討により脇侍像は建久七年(一一九六)六月十八 こまでの検討を踏まえて、これらの諸像の造像事情や仏師選定について考えてみたい。 も受け継がれている。また、後述の通り、大仏殿内諸像の造像には奉行が存在したことも分かっている。そこで、こ 中門二天像と大仏殿内諸像の造像経過は、 中門像は建久五年(一一九四)十二月二十六日に始まり、大仏殿内諸像 。 以

と考えられる。さらに第二章において、大仏光背の仏師選定は、頼朝の意志ではないことを推定した。とすると、当 以前からの一貫したやり方であったといえる。これら六軀についても、 関わること及び二度の供養以外には直接の奉加はせず、それ以外のことは御家人に請け負わせたことを指摘した。そ 頼朝の関与の可能性について検討したい。第一章では、幕府方による復興の主体は頼朝で、 大仏殿内脇侍像・四天王像を御家人達に奉行させたのは、決して異例のことではなく、むしろそれ 初めから頼朝は自ら関わるつもりはなかった 彼は大仏本体に

檀越としての面目を示せればよかったのであり、それ以上の細かなことに関心があったようには思われないのである。 指示をするということが果たしてあるだろうか。頼朝としては、 ここまでの検討からは、 から直接に関わる気はなかったと思われる大仏殿内諸像の仏師に関して、 大仏殿内諸像の担当仏師に関して、 頼朝が関与した可能性は極めて低いと導かれることを確 御家人に命じて諸像を完成させることによって、大 光背の時とは一転して、 頼朝が何らか 0

したことを伝える記事として、『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条がよく知られている。同条全文は次の通りであ そこで、次に幕府側奉行について考えてみることとする。 大仏殿内脇侍像 四天王像の六軀に幕府 側の奉行が存在 る(||國

認しておきたい

7) 建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府 千葉介常胤以下に仰せ付けられ訖んぬ。 次郎重忠。 家かたがたに助成せしめ給ふ。材木の事は、左衛門尉高綱に仰せて周防國において殊に採用有り。 畠山次郎重忠。 史大系』本による)。「造東大寺間事。 又二菩薩四天王像等宛||御家人||可\致||造立||云々。所謂観音。 知先訖。 朝政。 御家人に宛て造立を致すべしと云々。いわゆる観音宇都宮左衛門尉朝綱法師。 持国武田太郎信義。 只以下随 千葉介常胤以下 持國。 二公事 武田太郎信義。 一之思上。 |訖。而其功頗遅引之間。今日所」被| 多聞小笠原次郎長清。 縡若及 多聞。 将軍家旁令二助成 しかるにその功頗る遅引するの間、 懈緩 小笠原次郎長清。 者。 廣目梶原平三景時。 可!|辞申|之旨。厳密被| 給。 廣目。 材木事。 字都宮左衛門尉朝綱法師。 |催促 梶原平三景時。 また戒壇院の営作、 仰||左衛門尉高綱|。 世。 但各偏存 今日催促せらるるところなり。 |触仰 | 云々。](造東大寺の 又戒壇院営作。 |結縁之儀」。 虚空蔵穀倉院別當親能 虚空蔵。 於周 同じく小山 穀倉院別當親能。 防國 同被 可」成」功之由。 また二菩薩四天王 仰 [左衛門尉朝 間 殊有 ..の事、 苏 但 増長畠 |採用 | 。 Ш 増長。

170 に及ばば、 おの 偏に結縁の儀を存じ、 辞し申すべきの旨、 功を成すべきの由、 厳密に触れ仰せらると云々。) 御下知先に訖んぬ。 ただ公事に随ふの思ひをもってし、 縡若し懈緩

(8)

受けると見る読み方である。これは古く『大日本史料』がその解釈を採っており、「是ヨリ先キ、幕府、家人ニ課シテ、 については、意外に奥が深く、二通りの解釈があり得るかと思われる。一つは、その部分の直前の戒壇院造営だけを 東大寺ノ佛像及ビ戒壇院ヲ造ラシム、是日更ニ戒飭シテ、其工ヲ怠ルコト勿ラシム」との見出し文を付ける。この場 る。そして、その前に書かれている二菩薩四天王像の割り当てについてはこの日に決定されたという意味となる。こ 指すとする見方で、その場合遅れているのは戒壇院造営だけなので、催促を受けたのも千葉常胤と小山朝政以下とな 合、「遅引」していたのは、「材木事」、「二菩薩四天王像等」、「戒壇院造営」の三つとなり、 従来この記事は、 「事が頗る遅引」していることについて頼朝が催促をしたことが書かれており、この「事」の意味するところ 堀池春峰氏をはじめ、かなり広く行われていると思われる。しかし、いま一つ、「事」はその前の全てを 奉行の割り当てを決められた記事として理解されてきたことが多かった。しかし、この 催促を受けたのもここに 記事の終

じく」と書いてあることからも、この部分が前からの続きであることが察せられる。とすれば、この記事の解釈は後 壇院造営」の三つが挙げられ、それぞれは「又」でつながれて並立しているといえる。戒壇院のことについて、 東大寺間事。 将軍家旁令助成給。」で始まり、「旁」に助成させた内訳として、「材木事」、「二菩薩四天王像等」、

名が挙がる全員ということになる。

右二者のいずれをとるか、にわかには決めがたいものの、記事全体の構成、

文脈から見ると、この条は

その前提に立つと、次のことが導かれ

者と見るべきかと思われる。

王像助成の割り当てを行ったのは建久五年六月二十八日をある程度遡るであろうこと 御下知先訖 (御下知先に訖んぬ)」とされていること、 また頼朝が強く催促したことから見て、 脇侍像 四天 その上で大仏殿供養に臨むことを目指していたように思われる。

四天王像造立に向けた準備はこの時点で具体的にはまだ何も決まっていなかったか、 ないしは停滞した

③頼朝が助成の遅れを気にかけていたこと、それゆえ厳しい催促をしたこと

後者の前提に立てば、 ①は当然のこととなるが、その場合、 助成の割り当てを行った折の記事そのものは存在

いということは留意しておく必要があろう。

久記には、「入自東西廻廊中門」との記述がある。 (9) たのではなかろうか。 王像造立を含めての大仏殿の完成、及び二天像造立を含めた中門の造営を、 六軀に彼がそれほどの関心を持っているのはなぜであろうか。 厳しい催促を行ったことが知られる。 大仏殿供養に間に合わせようとしていたからとみるのが穏当であろう。恐らく頼朝の当初の目論見は、 ところで、③に関連して、 中門の完成には、その前提として回廊の造営も含まれた可能性があろう。 記事の様子からすると、 記事の末尾部分などはほとんど脅しに近い。大仏本体であればともかく、 中門・ 頼朝は大仏殿内の 回廊・大仏殿を揃えて、 前述した頼朝の姿勢から見て、 「二菩薩四天王像等」 大仏殿供養の前に終わらせることにあ 伽藍中心部の体裁を一通り整え、 六軀の完成を来るべき の遅れについ 『続要録』供養篇建 脇侍像 てか 四天

末から始まった中門二天像が早く、大仏殿供養を挟んで、建久七年六月から脇侍像、 仏所選定に関しては、意外に早く、一括して行われたと推定することも出来よう。 同年八月から四 田 邉三郎助 天王像という順 氏は大仏殿

仏所や仏師の選定に関しても示唆を与えてくれる。これら八軀の現実の造像経過は、

建久五年十二月

建久五年六月頃の可能性を指摘された。前記①②の通り、 「仏師の選定もあるいはこの時点であったかもしれない」とされ、 頼朝の厳しい催促があったことから見て、同年六月二十八

『吾妻鏡』

が奉行人の名を記した

像について、

も中門像造像が始まる同年十二月二十六日までの間に、

康慶や運慶が中門像に加わらなかったのもうなずける。以上のことから、八軀は建久五年六月二十八日以降、

康慶一門へ一括して注文されたと推定され

の時期の支援のうちで頼朝が直接に手を下さない仕事には、幕府方奉行の存在を想定するのはむしろ自然でさえあろ に述べた通りであり、 されていないし、戒壇院造営に関しても幕府側奉行の存在を記さない。つまり、東大寺側の記録に見えないからとい 幕 「成を命じられた「「旁」」とは、この時催促を受けた人々だけを指しているとは限らない。また、大仏殿内諸像につ :府側奉行が存在したことを想定するべきではなかろうか。『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条冒頭に述べられた、 幕府側の奉行がいなかったとはいえないことになる。『吾妻鏡』にも、 八軀がまとめて計画され、 『続要録』 頼朝が当初は、大仏殿内諸像と中門像を大仏殿供養に間に合わせる構想を抱いていたとすれば、 造仏篇は六人の奉行のうち、 何も問題がなかったら、奉行の名は伝えられなかったであろう。 注文されたとすれば、 観音・虚空蔵についての二人しか伝えておらず、 中門像にも奉行はいたと見るべきであろう。 奉行決定の折の記事は存在しないことは前 第一 章の検討から見ても、こ 四天王像分は記録

そこで、以上を前提にして、

中門像と大仏殿内諸像の全八軀が康慶一門に依頼されたのはいかなる事情であったか

営と関わりなく造立でき、

かの作用を及ぼしたとみる他はない。 思われる。 建久六年三月の大仏殿供養は大檀越頼朝のために行われたといってもよく、それに至る復興事業は幕府方の大いなる 支援によってなったことを考えれば、 を考えてみたい。この選定を行ったのが、 ただし、 頼朝自身は選定に直接には関わっていないとすれば、その場合は奉行たる御家人達の意向が何ら その意向が仏師選定に反映されたという従来の見方は基本的には従うべきかと 重源あるいは寺家なのか、 幕府方なのか、 いま確かな手がかりはないが、

確かによく知られた有力御家人が並んでいるが、いささか妙なことにも気付かれる。この八人の中に、北条氏、 そこで、いま一度 『吾妻鏡』 建久五年六月二十八日条に記された大仏殿内諸像六軀及び戒壇院の奉行八人をみると、

が可 より像高が高く、 中門像が大仏殿内諸像よりも格下の像であることが気になるが、 が奉行として参加していれば、これまでの関係から見て、 持つことが知られない人物ばかりであることである。ここからは全くの推測となるが、これに関しては二通りの見方 能かと思われる。 足利氏といった最も有力な御家人達が含まれないことと、大仏殿内諸像の奉行六人は現状では康慶 負担も大きく、供養までに間に合わせることが困難な仕事を他氏へ回したという見方もできる。加 一つは、 中門像奉行の候補として北条氏らを充てることができないかということである。 康慶一門を選ぶであろうことは理解しやすい。その場合、 北条氏は法量が小さく負担の少ない仕事を担当し、 門との縁を

足並みを揃えて行うのであれば、総奉行の存在は不可欠かとも思われる。 それ以上に考えるべきは、 総奉行の存在ではなかろうか。これだけの大事業を多くの御家人が奉行として 同じ時期に総奉行的な人物を推定できる例

供養までの完成を計算できるという利点もあったかもしれない。

大仏殿内諸像は建物の完成を待たないと開始が難しいという事情があったともみられ、

逆に中門像は大仏殿造

建久四年(一一九三)五月に行われた頼朝の藍澤・富士野の御狩が挙げられる。この御狩は東国において頼

了後に再び戻したり、 伊豆・駿河両国の御家人に命じていることが知られている。この時の時政の役目は総奉行的なものであったと思われ 朝 供養に間に合ったのは中門像だけであるが、中門像は、 慶、運慶への造像依頼を最も無理なく想定できるように思われる。結果的には、 を示す大イベントを東西で相次いで行ったといえるが、 北条氏が指揮を執っていたことが窺われる。恐らく時政が、この一連の御狩における総奉行の役割を担ったものとみ いう役を時政が行ったと見るのは憶測が過ぎるだろうか。このように考えれば、右記の二つの疑問も解決が付き、 もふさわしい。頼朝は、この時期、 てよいであろう。然らば、東大寺中門及び大仏殿内の諸像造立に総奉行が置かれたとすれば、 1の覇権を天下に示す重要な意味があったと指摘されている重要な行事で、駿河国藍澤・富士野において行われた。 北条時政は狩りに先立って予め駿河に下向し、狩倉を見たり、 一連の示威行動であったことが分かる。那須野の折りは、「藍澤」の屋形を解体して事前に運び、狩り終 御狩は藍澤・富士野だけでなく、それに先だって同年三月から四月にかけて下野国那須野などでも行わ 狩りの付き人「御隔心なき」二十二人の筆頭に北条義時が挙げられるなど、この時の世話にも 建久四年の御狩と同六年の大仏殿供養における大檀越という、 供養の折の「後鳥羽天皇表白」 御狩に次いで、東大寺供養に欠かせない諸像造立の総奉行と 御旅館の準備などを狩野介宗茂を奉行として 大仏殿内諸像は供養後の造立となり 13 一多聞持國 北条氏を宛てるのが最 いわば天下に覇権 新造奉安」と

て既にその力を示していた康慶、運慶らが、幕府側奉行の選定に適ったとみることはごく自然ではなかろうか。 わらないとはいえ、 造像の奉行となった御家人たちは、 文治年間以来の実績があり 頼朝がその選定に承認を与えるような、 (頼朝の不興を買わないという意味も含めて)、かつ南都復興では興福寺にお 北条氏を中心に仏師選定に当たったのであろう。 頼朝の意向に反しない選択を何より心がけたであろう。 その際、 頼朝は直接選定に関 山本

述べられ、

比較的重く扱われている。

総奉行であれば面目を保ったことであろう。

以上、

幕府による東大寺復興について検討した。その結果、第一章では、

幕府による支援の主体者は頼朝であるこ

ることにあったと推定した上で、

中門二天像、

大仏殿内脇侍像・四天王像の八軀はまとめて計画・注文され、

幕府側では中門像にも奉行がいたと考えられ、さらに総奉

師

の割り当てもその当初に決まっていたと思われること、

供養前に大仏殿

中

菛

(廻廊も含まれるか) を建立し、その安置仏を造立することにより、

伽藍の中心部分を復興す

ちにとって実績があり、 の立場における選定基準を考えないわけにはいかない。 勉氏が述べられた康慶一 をしたという側面は無視できないように思われる。 この時点で康慶一門を選ぶのは、 東大寺復興の仏師選定に頼朝自身が直接関わってはおらず、御家人たちに任されたのであれば、 最も安全な(仏師としての力量という面と頼朝の承認が得やすいという両面におい 門の規模の大きさという問題は、新しい観点で、たしかにこうした面もあったかもしれない。 文治年間初頭におけるほど消極的選択ではなかったかもしれ 北条氏ら有力御家人層と運慶らとの文治年間以来の 頼朝自身と康慶や運慶との直接の関係は史料的には見出せな ない 関係の積み重 が、 やはり彼ら 7 御家人た

おわりに

ねが、

東大寺復興という大きな舞台を得て、

新たな段階を迎えたのである。

び大仏殿内諸像の仏師選定を頼朝自身が行ったとは思えないことを確認し、大仏殿供養に向けた頼朝の当初の構想は 奉加の中身は、 第二章では、 の仕方には頼朝自身によるものと頼朝が御家人に請け負わせたものの二通りがあること、 大仏鍍金及び光背漆箔のための金と、大仏開眼供養及び大仏殿供養への米・金・絹に限定されてい 大仏光背の仏師選定に頼朝は関与していないと思われることを述べた。 第三章では中門二天像及 頼朝が 直接行った る

行のような存在も想定されること、具体的な仏師選定では頼朝の承認を得ながら奉行の御家人の意向が反映したと思

北条氏が中心的役割を果たした可能性があること、などを論じた。

幕府の ば間違ってはいない。 部分があったのかということは重要なことと思われ、 を有していた康慶は避け、その子息である運慶に落ち着いた、と推定した。頼朝と時政とでは、 に成朝を起用したのは彼が定朝嫡流であることが大きな理由であったことを承知していたため、 をする必要があろう。 成を寺家あるいは都の人々からみれば、頼朝か御家人かの区別はないはずで、全て頼朝の、あるいは鎌倉の沙汰と映 しやすいのではなかろうか。 の関係を有していた鎌倉幕府が助成していたからであるとする従来の見方は、 たであろう。それも一 基準が根本的に異なると思われる。このように、決して幕府内の全員が平等でもなければ考えを同じくするわけで 関わった造像をより精密に、 頼朝及び幕府を構成する様々な人々は、その身分も立場も考え方も判断基準もそれぞれに異なる。それゆえ、 東大寺復興を鎌倉幕府との関わりによる造像という観点から眺めてみた。 成朝は避けて敢えて傍流の仏師を用いることとし、その中でも成朝が無位であることに配慮して僧綱位 東大寺復興造像においても、 面の真実で、その意味では、 筆者は近時、 わば、 西の視点である。ただし、これらを幕府の側 北条時政が願成就院像に運慶を用いた折の判断については、 ないし現実に即して分析することにより、 具体的に仏師選定を行ったのが頼朝自身であったのか、 中門像以降の巨像制作を康慶一門が独占したのは、 後者の部分を考えることにより、 個々の造像及び展開の実態が見えて来 大筋では、 東の視点―― この前後の彫刻史もより理解 しかし、幕府方による復興助 ないし寺家や都人からみれ から見ると、 判断に至る過程とそ 頼朝の怒りを買うこ 頼朝が勝長寿院造仏 文治年間以来 別の見方

運慶に引き継がれてゆく康慶一門の繁栄は、

文治年間以来東大寺復興に至る十年余りにわたり、

幕府というより、

く用いられるのも、 正 確には御家人達と密接な関係を築いたことが基礎となっているといえる。そして、頼朝没後も運慶一門が幕府に重 北条氏ら御家人達とのこうした幾多の経緯があったからこそと考えられるのである。

注

- 1 山本勉 「鎌倉時代初期の幕府関係の造像と仏師」(『清泉女子大学紀要』五三 二〇〇五年一二月)。
- 2 リタリケルコソ、中々物ミシラレン人ノタメニハヲドロカシキ程ノ事ナリケレ」とある。 「武士等ウチマキテアリケル、大雨ニテアリケルニ、武士等ワレハ雨ニヌルルトダニ思ハヌケシキニテ、ヒシト居カタマ
- 3 研究』三一四 二〇〇五年三月)。 拙稿「成朝、 運慶と源頼朝』(『日本橋学館大学紀要』三、二〇〇四年三月)及び「願成就院の造仏と運慶」(『金沢文庫

有名。 ここく こくくらな ミリン

(4) 五味文彦氏は、院尊の起用を九条兼実の意向とされている。

『大仏再建』 (講談社選書メチエ五六 一九九五年九月 講談社)。

毛利久「東大寺復興における重源と奈良仏師」(『仏師快慶論』

一九六一年一〇月

吉川弘文館)。

5

- (6) 武田信義は文治二年(一一八六)三月九日に没した記事がある(『吾妻鏡』同日条)。 彦氏は、文冶二年は正治二年の誤りであろうと推定されている(前掲注4書終章)。 も信義は登場する。この矛盾は、『大日本史料』第四編之四(一九○五年一○月)にも指摘されている。これについて五味文 しかし、『吾妻鏡』には建久年間に
- 7 家人に割り当てて願主とし、戒壇院の再建をも急がせる。」とされる。 堀池春峰「東大寺年表」(『秘宝 東大寺』上 一九六九年十一月 講談社)では、「頼朝、 大仏脇侍・四天王像を有力御
- (8) 『大日本史料』第四編之四(一九〇五年一〇月)。
- 9 〇月 ただし、廻廊が大仏殿供養までに完成していたかどうかは確かでなく、『奈良六大寺大観九 岩波書店) では 「四面廻廊代」「南東西廻廊代」などの語がみえることから、未完成であったとされている。 東大寺一』(一九七〇年一
- 10 田邉三郎助『運慶と快慶』(日本の美術七八 一九七二年一一月 至文堂)。

で、

仏師選定に指示を出したとはなおさら考えにくい。

- (12) 前揭注 1 論文。(11) 田邉三郎助前揭注 10 書。
- 13 上横手雅敬「東大寺復興と政治的背景」(『龍谷大学論集』四五三 一九九九年一月)。 前掲注1論文。
- 14 仏師選定が大仏殿供養後の建久七年頃に行われたとすれば、その頃の頼朝はもはや東大寺復興への関心は冷めているの
- 15 浅井和春・浅井京子は、大仏殿完成まではこれらの巨像に着手しようがなかった可能性を指摘されている。
- $\widehat{16}$ 浅井和春・浅井京子『東大寺Ⅱ』(日本の古寺美術七 『吾妻鏡』建久四年五月二日条。 一九八六年九月 保育社)。
- 17 同年三月二十一日に那須野へ出発、二十五日に武蔵国入間野で追鳥狩、 四月二日に那須野に入り、二十三日に終えた。
- (21)『続要録』供養篇末。 (20)『吾妻鏡』建久四年三月二十一日条。

19 18

『吾妻鏡』

建久四年四月二十三日条。

建久四年三月十五日条。

23

拙稿前揭注3。

22 とも選定における一つの基準であったろう。 成朝は建久五年九月二十二日の興福寺金堂供養までは生存が確認できる。御家人たちにとって、成朝は避けるというこ

	頼朝、院に材木の杣出しの円滑化や勧進促進の	3 16		
	まず(吾妻鏡)。 周防国地頭に東大幸	3 . 4	一八七	文治三
大仏開眼供養(玉葉、続要録)。		8 28		
	東大寺雑集録)。 東大寺雑集録)。 上絹千疋を重源聖人に送る(吾妻鏡)。 上絹千疋を重源聖人に送る(吾妻鏡)。 頼朝、東大寺修造料として米一万石、沙金千両、頼朝、東大寺修造料として米一万石、沙金千両、	3 7	一 八 五	文治元
	ノ七〈平安遺文四一五八〉)。 書を東大寺に奉ず(共に延期)(東大寺文書四大江広元、秋の頼朝上洛と金の寄進を約す御教	7 . 2		
	黄金千両奉加を語る(玉葉)。 造寺長官藤原行隆、兼実に頼朝の大仏滅金料の	6 · 23		
	四一四七)。 頼朝、伊賀鞆田荘を東大寺に返付(平安遺文	4 · 3		
大仏左手鋳造終わる(玉葉)。		1 5 頃	一一八四	元暦元
大仏頭部鋳造(4・19~5・18)(玉葉、続要録)。		4 ~ 5 月		
大仏右手を鋳造(続要録)。		2 · 11	一八三	寿永二
重源、陳和卿と大仏鋳造を論ず(続要録)。		7 23	一一八二	寿永元
大仏の螺髪を鋳造(玉葉・続要録)。		10 6	一八八一	養和元
主な事項	幕府関係の支援	月日	西暦	和暦

	都の一条能保へ送る(吾妻鏡)。 頼朝、大仏御光料(漆箔)の砂金百三十両を京	5 10		
	院尊に下すため、京都へ送る(吾妻鏡)。頼朝、大仏御光料(漆箔)の砂金二百両を仏師	3 · 22		
法橋院俊、法橋院康)、小仏師六十人(続要録)。人(法眼院實、法橋覚朝、法橋院圓、法橋院範、大仏光背制作始まる。大仏師法印院尊、弟子六		3 12	一 一 九 四	建 久 五
	精誠を命ず(吾妻鏡)。 頼朝、周防国地頭に東大寺造営料米についての	3 · 2	一九三	建久四
	ねて催促(吾妻鏡)。 頼朝、佐々木定綱に周防国からの材木運搬を重	12 · 29	一九二	建久三
	(吾妻鏡)。 して明年中に柱材四十八本を運搬するよう命ず 頼朝、畿内・西海の地頭に佐々木高綱を奉行と	閏 12 · 9	一 一 九 一	建 久 二
大仏殿上棟(吾妻鏡、玉葉、造立供養記)。		10 · 19	一九〇	建久元
	倉遺文三八○)。頼朝、東大寺領伊賀国鞆田荘の地頭職を停止(鎌	4 · 7	一 一 八 九	文治五
	力を求める院宣を請う(吾妻鏡)。頼朝、重源の求めで材木運搬への諸御家人の協	3 17		
	きことを中納言経房に申し渡す(吾妻鏡)。頼朝、東大寺修造について殊に重源に合力すべ	2 18	一 八 八	文治四
	源に伝える(鎌倉遺文二六一)。頼朝、御家人の佐々木高綱が力になることを重	9 · 8		
	を命ずるよう朝廷に求める(玉葉9・29条)。頼朝、藤原秀衡に大仏鍍金のため三万両の進上	4 月		

	建仁三	建仁元
	1110111	10111
11 30	10 · 3	12 27
東大寺供養(続要録、明月記、百錬抄等)。	南大門仁王像開眼供養(別当次第、続要録)。	快慶作僧形八幡神像開眼供養(像内銘)。